

ごくありふれたダン
ジョンマスター転生物
(仮

phantom

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿

よくあるダンジョンマスター物。

多分続いたらR18送りになる。

抑え切れなかったので、主人公が調教されるIFルート書きました。

目次

第1話	1
第2話	説明回。飛ばしても多分問題 ないです。
第3回	8
第4話	16
第5話	20
第6話	23

第1話

よくあるように、人生を諦めて、自殺した。

暗く吸い込まれるような闇に包まれながら自分の意識が存在していることを不思議に思っている。

これまたどっかで見たような窓が目の前に現れた。

どうやら。

ここはよくあるレベルやらスキルやらあるなろう系異世界で、ダンジョンマスターをやれということらしい。

んで、自分は魂のみの状態であり、ダンジョンコアに入っており、ダンジョンコアは高値で売れるというこれまたどっかで見たことがあるような説明が綴られているのを読んだ俺はその時点で真面目に読むのをやめた。

取り敢えず長い長い説明をざらっと流し読みしてリソースとかの確認をすると、DPというステータスで一括で管理しているとのこと。

「ご丁寧に0.1/sとか書いてあるし。自然回復すんのかよ。

んで。

丁度2000あったので部屋(200消費)やらモンスター(ゴブリン、1体500消費)やらを配置していると、0.1001/sと増えているのを発見。

慌てて確認してみると、どうやらダンジョン内に存在している「意識を持っている存在」によって生産されるらしいということが判明。そいつが死んでも増える。ドカンと。

これ、ダンジョン内にわざわざ危険を冒して人入れる必要無くね?と思ったが、生きている魔物は飯食べないと死ぬらしく、飯を生産するためのプラントを維持することを考えると人を入れないとDPが減っていく一方らしい。

ちなみに、飯を食べない奴もいる。所謂アンデット系の奴らがそうで、一番安いのはスケルトン(100)。

速攻でゴブリン殺してスケルトンを作れるだけ作ろうかと思ったが、どうせなので餓死する寸前まで放置しておくことにした。

そんなこんなで一仕事終えたので、時間つぶしに説明を熟読していたのだが。悲報。俺このままだと寿命後半年ぐらいらしい。

どうやら、人間の魂は単体では存在し続けることを想定している構造ではないらしく。

肉の器に入っていない状態で4〜5か月程経過すると、魂が崩れ始めるらしい。

記憶の消失、時間感覚の麻痺という症状が出始め、最終的には自我が崩壊していくらしい。

・・・こっわ・・・

幸いにして明確な対処法が存在しており、

・人間の新たな肉体を得る

・同意の上で、人間の体内に専用の器官を作り、その中に入る
以上2つが判明していると説明に明記してあった。

何というか、薄い本にありそうな設定だなあ（現実逃避

というわけで、ダンジョンマスターとしてハーレム作るぞ!! (投げやり)

この時に「なお、明確な性別を保持した状態で一定期間以上一つの肉体内に魂が1つのみ存在していた場合、以後異なる性別の肉体に宿る事は出来ません。」という1文をキチンと読まなかったことを滅茶苦茶後悔することになるのだが、それは遙か未来のお話。

第2話 説明回。飛ばしても多分問題ないです。

なんやかんやで見えたタイムリミットを棚上げすることに成功したので、説明を読みつつ時間つぶしするぞー！（ヤケクソ

~~~~~

- ・ 1日目。説明読んでゴブリンとスケルトン作った。
- ・ 2日目。説明読みつつスケルトンを作った。（2体）
- ・ 3日目。窓を色々いじりつつスケルトンを作った（2体）

というわけで色々判明したので上げていくと、

- ・ お馴染みの管理人系AI的な奴は見当たらなかった。
  - ・ スキルはDPでもある程度買えるが、（小）とか名前に付いているので弱そう（「目覚まし」100DPや、「ステータス確認」1000DP、「worker」「Excite」5000000000DPといった、DPをコストとしたアプリケーションっぽいものもあった。露骨に最後やべえのあんなあ・・・5億つておま・・・
- メモ帳とかいう神アプリはコスト無しで使えるみたいです。起動したらなんか懐か

しい感じのタブと共に半透明のPCのキーボード出てきた。

・モンスターについて。

・DPを消費して作ったモンスターを戦わせても経験値は入らないが、同じレベルのやつを重ねるとレベルが上がる。

・重ねるには専用の部屋と設備が必要。

設備お高いのなんの。「合成陣 10000DP」とか笑うわ。無理。

・生成するコストを見る限り、強さ当たりの消費DPレートがあるっぽい。

・なんか触手系のやつだけ妙に安い。

・触手系の維持は一部を除いて水と「寄生先」 or 「母体」になってる。

うわぁ・・・

・後、どつかで見たような「研究可能な技術」タブが・・・

・部屋の広さは消費DP÷100体のモンスターが配置（戦闘）出来る程度。

大体読み終わったというか疲れた。後飽きた。本好きな方だけど流石にこれ以上読み続けるのは流石にきつい。

というわけで、スケルトンを1体ダンジョンの外に出します。

探索用スケルトン150DPさん。DP算出0、身長50cm程の小さいデフォルメな可愛い子です。

戦えません。

めっちゃ脆いです。

その代わりに何と、簡易的に感覚同調できるらしいのです。

ダンジョンコアから半径1キロならまるで乗り移っているかのように行動できるらしいです。(DP追加消費で強化可能)

この子をダンジョンの外に出して周辺の探索をば。暇つぶしも兼ねて。

一応出す前に、ダンジョンに侵入された場合に備えてきちんと準備をしておく。

お約束なのか何なのか、1度ダンジョンを開けてしまうと閉じるのにコストがかかるので。説明には、「コスト」と書かれているのが妙に気にかかる。DPじゃないのか…？

というわけで、スケルトンズの配置が終わったのでいざ、異世界に足を踏み入れますか。

## 第3回

はい、というわけで外に出たのだが。

木々が辺り一面に広がっており、薄暗い。振り返ると土壁にぽっかり穴が開いているのが見える。木々もかなり高い。多分3m以上あるでしょこれ。

どうやら山の中らしい。

まあ火山とかじゃなくて助かったと思いたいが、場所が場所なので。これ人来ねえ奴だろ。

たまたまたとしても近くの集落の狩人さんとかになるでしょ。

というわけで。

探索といきましようか。

最優先で探すべきな物は湧水や川、時点で獣道。

~~~~~

取り敢えず、立地が山の中ということである程度のダンジョンの第一層の構造を決められた。あ、お約束だけどDP消費することで階層は追加できる。

ダンジョンの部屋編集の外枠が若干丸みかかっていたことから山の中なのでは？という疑惑はあったのでその前提である程度考えていた。

後、「立地条件無視化」とかの項目がDP消費のオプションであったから……まあ……つて言ったところだが。

最優先で水資源を探している理由だが、それをダンジョン内に引き込みたいからだ。

立地の関係上、外部より侵入して来る人間にDPを期待することは当分の間出来ない。

よって、現状のリソースをできる限り有効活用するべきだ。

そこで注目しているのが、妙に安い触手系のモンスターである。

こいつらの維持の「母体」の生物の種類指定はかなり緩い。

哺乳類か爬虫類かぐらいだ。(例外はある)

その上で、こいつを見てほしい。「触手 (母体維持、繁殖用)」

察していただけると思うが、こいつも維持に要求している物は同じなのだ。

つまりだ。適当なメスの動物を確保した上で、どこから水を調達出来ればほぼノーコストで維持できる。そして増やせる。

時間と場所以外リソースを要求しない生産施設とか最強だろ？そういうことだ。

自動でマッピングされてる。

もうDP溜まっただと一時的に探索を中断して、意識をコア内に戻して窓（ぶっちゃけコンソールでいいよね？）いじっていたのだが、新たな機能解放されてた。

マップである。

一度行ったことのある場所のその当時の状態が自動的に保存されるという素敵機能。後、ざっくりとした数字のない時計も付いてる。太陽と月が書いてあるやつ。便利。

うーん、素晴らしいぐらいに木しかねえ。もうちよい探索しますか。

どうせだし、今のうちにどの様なダンジョンにするか説明してしまおうと思う。

メインはアンデットではなくて、素直にゴブリン等のモンスターを配置しようと考えている。

具体的に、ゴブリン等の集落が林の中にあり、そこから湧いてくると言った形だ。その上で木々に植物系のモンスターを混ぜる事によって不意打ちを狙う。

だが、十中八九纏めて焼き払うという形で対処してくるだろう。

その対策として、

- ・ マップを迷宮型にして、集落を大部屋にする
 - ・ 火気に反応して天井が崩れて土砂が頭上から降ってくるというトラップ
- というのを考えている。

構造として、壁と天井を「木々や蔦に浸食されて崩れかけている壁」（DP関係オブション、強度が低くなる代わりに部屋を作る際のDP消費軽減）で作る。

んで、支柱代わりに木を配置する。

ぶっちゃけダンジョン内で人が死にさえすればDPは手に入るのでこのトラップがド本命である。

それに、このトラップから生還できた場合に「天井などが脆く、火気によつてダンジョンを支えている木々が失われた場合天井が崩れる」という情報が出回る可能性は非常に高いので、その情報自体が火気に対する回答になる。

知らない危険性はかなり高いからね。

ちなみに、「瀕死状態の侵入者を自動的に中に送り込み、武装解除した上で拘束する」という機能を持つが建設と維持にDPと各種資源を消費する、「監獄」という施設を作れたりする。

ほーん・・・

これらを加味すると、ダンジョン内に置くモンスターは「比較的危険性が低く、旨味を考えると中人数で来るであろうモンスター」が好ましい。

よつて、戦利品の質に鮮度が関係する樹木系のモンスター（葉っぱとか根っこかが薬の材料になるらしい）と、ゴブリン等の適度に弱く連戦で注意力を削れるモンスターとなる。

そして、森林がある山の中という立地から「湧水が流れ出る場所に自然とできた水くみ場」というのはあつてもおかしくなく、そこで不意打ちを狙うということが出来る。

なんなら、その裏らへんに触手系の部屋を作りたい。

まあ、水資源が見つかったらのお話なんですがね!!!!

~~~~~

あれから時間が経ちまして。

取り敢えず、半径1キロという範囲のマツピングは終わった。

割としっかりした獣道があったのと、凄く微かにだが川が流れているような音が聞こえたから水資源の存在は確定。

微かにでも聞こえるということはかなり流れが強いということなので、水の生産にリソースを使う必要は無くなりました。

良かった良かった。  
さて。

薄暗い森の奥。聞こえるのは謎の羽ばたきと鳴き声が時々。

そんな森なので、創作物なら古びた洋館あってもおかしくないよなwwwとか思っ

たんです。

ありました。洋館。まんまイメージ通りの奴が。

ここはシンオウだった・・・？とか考えて茶化した後放置してます。

だってなんかやばそうなオーラ感じるんだもん。

取り敢えず、今使ってるスケルトンをダンジョン内に戻してDP消費して強化して探索範囲増やして川探し続行するとしてみましょうか。

一応スケルトンの体に入った状態でもコンソールはいじれるが、

- ・拠点の外に出ている対象を指定したDP等の各種リソースを消費する行動
  - ・ダンジョン内に侵入者がいる状態でのダンジョンの構造の操作
- が出来ない事が判明している。

つまりは、「石の中にいる」が出来たりする。内部にいる状態なら。

川は2・5キロほどダンジョンから離れてました。

川は見つかつたので、一回ダンジョンに帰って水路作りましょうか。

というわけで、帰宅〜〜!!

あ、ゴブリンはお亡くなりになりました。

5日目でした。

消費DPの大部分は回収できたとはいえ、後2、3日待ってくれたら水が飲めたのに・・・(なお、飯が食えるとは言っていない)

「そこにいるの、だれ・・・？」

## 第4話

「そこにいるの、だれ・・・?」

若い女性のような声が聞こえる。

・・・まじか。近くに人が居そうな場所無かったんだけどなあ。

それに、声からして少女のようだ。

ここは薄暗い森の奥。川からは最低1キロは離れており、川遊びで来たとは考えられない。

普通川遊びではぐれた場合、探しに来た大人が見つつけやすいよう川の近くにいるはずである。

ゆっくりと振り向く。

そこには、片手に人形を持ったゴスロリ幼女が立っていた。

~~~~~

あの後、素で固まっていたら、腕を取られて洋館に連れていかれた。

「あの」やばそうな洋館である。

腕を取られて、まるで自分の庭のように進んで行くので嫌な予感はしていた。

洋館が見えるまではされるがままついていったのだが（若干呆然としていた）、見えた瞬間に思わず腕を振り払おうとした。だが、できなかつた。

力を入れようとしたら何故か力が抜けるような感覚がした。立ち止まることもできなかつた。どうやらこの子に触られていると、この子に逆らうような能動的な行動がキャンセルされるらしい。

そのまま洋館に連れていかれた。

そして如何にも子供部屋といった部屋に直行し。

「悪い子はめつだよ?」

というセリフとともに、おでこにシールのなものを張られた。

それから何故か喋れるようになった代わりに、彼女の発言に対して逆らえなくなつた。

一応やろうと思えばできないこともないが、滅茶苦茶疲れる。寿命削つてる気がす

る。

そして、ハイライトが消えた瞳を向け、「なんで？悪い子なの？」と聞いてくる。
怖い。辞めよう。

そして、おままごとに付き合わされている。

ちなみに、スケルトンの憑依を解除出来なくなってた。

ヤバイ（確信

~~~~~

夜になった。

あの後、幼女の喋りが段々と饒舌になつていくという若干奇妙なおままごとに暫く付き合ったのちに夕食を ご馳走になった。

台所について行ったら、踏み台があちこちに置いてあり、非常に慣れた手つきで料理を作っており。

色々考えるのをやめた。お手伝いした。

夕食は鮭っぽい魚のムニエルとパンでした。美味しかったです。

~~~~~

ずっと喋りかけ続けていたその子は、どうやら会話という行為そのものに飢えていた

らしい。

どうやら過去に何かあったらしく、たった一人でこの洋館にて暮らし始めて早3年目。

絶対にこの森に人は入ってこない。

食べ物も定期的には保存がきくものが火と水の魔石と書籍と共にこの洋館に送られてくる。

書籍は高価なものらしく、全て売ってしまえばお金持ちだよと無理に笑顔を作り話した彼女の瞳には薄っすら涙が浮かんでいた。

流石に喋り続けて疲れたのか、夕飯を終えたのち時間を経たず眠りについた。

「夢じゃないよね?」「次目覚めたらいなくなつてたりしないよね?」

と、半開きの瞳を必死にこすりながら聞いてきた彼女。

ベットに入ったので頭を撫で続けていたら糸が切れたように眠りについた。

流石に見捨ててダンジョンに帰るには良心が痛む。

取り敢えずコンソールを開いて色々を確認をしよう。帰るか決めるにはまだ早い。

何故なら、夜は長いからだから。

第5話

と、コンソールを立ち上げたのだが。

なんかDPめっちゃ溜まってる。なにこれ・・・

昨日までのDPの日間生産量は170。んで、今朝時点でのDPは225溜まっていた。

コツコツ貯めて、合成陣を作ろうと頑張っていたのだ。ちなみに、1万5千もかかる。

んで。いくつ溜まっていたかというと。

4まんごせん。

あるえ・・・？

色々と確認しました。ええ、しました。

なんか幼女がマスターになってる。道理で逆らえない訳だわ・・・

んで。この洋館が拠点になっているらしい。拠点というのは、ダンジョン外でもDPを生産できるようにするのができるシステムで、設定できる広さがダンジョンコアの

レベルによつて決まる。

ダンジョンレベルというのは、一定期間内に爆発的にDP生産量が増加した時に上がり、各種機能がレベルに応じて解放されていく。

そして、「ダンジョンレベルの上限」を消費することでダンジョンを閉める事ができるらしい。勿論上限値を増やす方法も存在しており、ダンジョンコアを吸収すればいいようだ。もし複数コアを所持しているのならば、所謂「子ダンジョン」を作ったりもできる。

という内容の説明が増えてた。増えるのかよ。最初からすべて読ませろください。

機能拡張だが、なんか時間の流れる速度を制御できる部屋とか、工房とか研究室とかあと苗床にした母体を維持する部屋、後「器を作る施設」とか進化陣とか作れるようになってた。

えーと、取り敢えず。

まず、この洋館に対してそんな設定をした記憶はない。これはおそらく、マスターの住んでいる場所が自動的に設定されたのだろう。なんか悪用されそうな能力だなあ。

後、ダンジョンコア使った陣地取り合い合戦やっていそうですねこれは……。

絶対ダンジョンコアが高値で売れている理由だろこれ。

それと、このスケルトンの体が暫定とは言え器として登録されている。それに関係してなのだが、このスケルトンの体が結構強化されている。

多分量産しているスケルトン纏めて相手出来るなこれ。

そして、マスター（幼女）もDPを生産してくれているのだが。

生産量はコアのざっと20倍である。

取り敢えず、暫くここで暮らしつつダンジョンの開拓やらを進めて行こうと思う。

マスターから自立するための方法を探すのが最優先課題。その方法を知る一番の近道は、マスター本人から直接聞き出すことだ。ダンジョンレベルを上げた際に追加される情報の中に入っている可能性もある。それに、この世界には魔法が存在しており、それを習得することはこの先において役立つだろう。

というか、魔法。使ってみたいです。物凄く。

第6話

はい。とりあえず、何かめっちゃあるDPを使って、

念願の水路を引きました。なんか滅茶苦茶消費重かった。

1キロ当たり1万DP。

まあ、こんだだけ消費重いということは、どうせ実はやっていることはダンジョンでしか出来ないチートでしたーみたいなやつなので、大胆に2・5万使います。

後は合成陣と部屋を・・・ってやっぱこれ高いって。1万っておま。
というわけで作ったのですが。

作ったら、指定レベルでDPを使ってモンスターが作れる機能が解放された。

今じゃないんだよ、最初からやらせるよ・・・。

というわけで、取り敢えずLv10でスケルトンを固めることにした。

Lv10のスケルトンが24体。何というか、感慨深い・・・

残りで部屋と監獄を作ってひと段落。

それじゃ、ますたーの寝顔でも眺めているとしまししょうか。

~~~~~



本格的に日が昇った、大体9時か10時ぐらいに起きたますたーは、しばし見つめたのちに。

花が咲き誇るかのように笑った。

そのまま5分程見つめ合ったのちに、ふと我に返ったようにベットから飛び降り。慌ててキッチンに向かった。

その後慌てて朝ごはんを食べて一服。

パンと簡単なスープと、昨日の魚を塩もみして乾かしたものを焼いたもの。

美味しかったです。

その後、師匠についていき、物を運ぶ手伝いをしたのちに、空き部屋になれたように書いた物は、ちよつとさつき見たものと酷く似ていた。

合成陣と。

ますたーの一族は、かなり古くからあるネクロマンサーの一族だったらしい。

そんな一族に生まれ、幼くしてその才能の隣辺を見せた彼女は、所謂英才教育を施されたそうだ。

そのおかげで今も生きていると、彼女は笑いながら話した。

すぐに真剣な顔になると。

曰く、そのスケルトンの体はとても不安定で、自分自身の生み出す魔力に耐えられず

に崩壊する危険性と隣り合わせなのだと言う。

なので、早急に手を打つ必要があるのだという。

だが、根本的な対処をするために必要な材料が手元に揃っていない。

なので、今から応急処置をしてから、時間をかけて身体をなじませるらしい。

というわけで、魔法陣の中に立って欲しいと言われた私は、それに従って。

魔法陣が昏く昏く光って、

目の前が真っ白になった。

全身を包む、抗いがたい苦痛。だが、ますたーの声と存在を感じると、段々と楽になつていき。

意識が途切れた。